

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：33803

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13041

研究課題名（和文）海外日系コミュニティの小規模グループにおける継承日本語教育

研究課題名（英文）Japanese as a Heritage Language Education in Small Groups of Overseas Japanese Communities

研究代表者

谷口 ジョイ（TANIGUCHI, JOY）

静岡理科大学・情報学部・准教授

研究者番号：80739201

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：海外に暮らす子どもたちが継承語を学ぶ場としては、家庭や週末補習校のほか、保護者が自主的に運営する小規模なコミュニティが挙げられるが、こうした組織の実態については、不明な点が多く残されていた。本研究では、主に保護者によって運営される組織において、どのような教育実践が行われ、どういった言語使用が見られるのかを明らかにした。また、従来の研究においては、複数言語を併用する児童の言語能力をモノリンガル児童と比較した上で、その差異に焦点を当てた分析がなされてきたが、本研究では、二言語の混在・交差使用（code switching）を創造的かつ主体的な言語使用であるとし、新たな枠組みで捉え直している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、定住者の多い豪州・メルボルンと韓国・ソウル、一時滞在者が大部分を占めるアラブ首長国連合（UAE）ドバイにおける継承語学習コミュニティを事例に、私的な「家庭」という空間と、公的な「学校」という空間の狭間にある共同体を特徴づけるさまざまな事象について検討を加えた。

管見の限り、ドバイのように、永住者が極めて少なく、数年単位での移動が前提となっている社会における調査は、これまで行われていなかった。こうした継承語学習コミュニティに参加する日本人の母親が、日本語の継承という行為にどのような意味を見出し、何を継承することを望んでいるのかを明らかにした点で、本研究は意義深い。

研究成果の概要（英文）：In addition to homes and weekend schools, small-scale communities run voluntarily by parents are other places where children living abroad learn their heritage languages. However, much remains unknown about the actual status of these unofficial organizations. In this study, the researcher sought to clarify what kind of educational practices and language use are observed in these organizations, which are mainly run by Japanese mothers. Furthermore, while previous studies have compared the language proficiencies of children who use multiple languages with those of monolingual children and focused on the differences between the two, this study redefines code switching as creative and strategic language use by adopting a new framework.

研究分野：社会言語学

キーワード：継承語 日系コミュニティ 日本語教育 海外子女 バイリンガリズム バイリテラシー 質的研究  
研究方法論

### 1. 研究開始当初の背景

多言語・多文化社会を語る上で、海外に暮らし、複数言語を日常的に使用する「日本につながる子どもたち」に関する議論は、不可欠なものとなっている。一方、こうした子どもたちの言語に関わる諸問題は、日本社会において広く理解されているとは言えない。

人的移動の活発化により、自らが居住している国や地域で使用されている主要言語以外の言語に帰属意識を有する場合がある。このような言語は多くの場合、親の母語であり、それを子どもが継承するという行為に着目し、「継承語 (カミンス・ダネシ, 2005)」と呼ばれる。

子どもたちが継承語を学ぶ場としては、家庭や教育機関のほか、保護者が自主的に運営する小規模なコミュニティが挙げられるが、公的資金が投入されない組織の実態については、不明な点が多い。このような状況を踏まえ、本研究では、主に保護者によって運営される組織において、どのような教育活動が行われているのか、また、組織内で、どのようなスクリプトが教示され、どういった多言語使用が見られるのか、という「問い」について、多角的・包括的に検討した。本研究での「スクリプト」とは、「ある特定の場所や時間にふさわしい行為や言語表現の系列」を意味し、社会文化的に構造化されたものを指す (Schank & Abelson, 1977; Nelson, 1996)。

### 2. 研究の目的

本研究は、海外に暮らす「日本につながる子どもたち」の継承語教育を目的とした保護者主体の学習コミュニティにおいて、どのような教育実践が行われているのかを調査し、複雑な言語体系を有する子どもたちのスクリプト獲得や多言語使用について明らかにすることを目的としている。

こうした子どもたちの継承語教育に関しては、日本人学校や週末補習校を対象とした調査が多く、筆者が知る限り、「海外日系コミュニティの保護者が自主的に運営するグループ」を対象としたものは見当たらない。

また本研究では、韓国・ソウル、オーストラリア・メルボルンのほか、アラブ首長国連邦・ドバイにおける学習コミュニティを調査対象としている。世界でも類を見ない経済発展を遂げたドバイは、人口の流動性<sup>1</sup>が高く、こうしたコミュニティに参加する家族は固定的ではない。一方、他の調査地 (韓国、オーストラリア) の日系コミュニティは、主に定住者によって構成されるため、人的流動性がコミュニティの教育活動に与える影響について比較することも目的としている。

### 3. 研究の方法

本研究の手法は、以下のようにまとめられる。

(1) 継承語教育に関する国内外の研究について、参考文献及び先行研究の収集・調査により、その概要をまとめた。幅広く文献精査を行い、現状を明らかにした。

(2) 韓国・ソウル、オーストラリア・メルボルン、アラブ首長国連邦・ドバイにおける継承日本語教育を目的とした小規模な学習コミュニティにおいて、実地調査を行った。活動観察、及び組織の運営者・指導者・保護者に対し、面接調査を実施した。保護者を対象とした面接調査は主に、多様なデータに効率的にアクセスすることが可能なフォーカスグループ・インタビューにより実施し、他者との関係性の中で相対化した自己の経験や考えについての情報を得た。

(3) 調査で得られたデータは、質的データ分析ソフトウェアを用いて分析を行い、教育活動の概要、保護者の役割、教育活動によって形成されるスクリプト、組織内で見られる多言語使用の4項目に基づき評価した。

については、複数言語を併用する子どもたちの言語能力を包括的に捉え、多言語の混在を translanguaging (言語交差使用) という理論を用いて捉え直した。活動観察に加え、指導者から提供される授業の教案、授業報告、応募者のデータ解釈に対する保護者のメールによるフィードバックの収集も行った。これらのデータを用いて、児童や保護者、グループ運営者の意識、価値観といった個別性を質的に調査した上で、グループ参加者がどのような課題に直面し、どのような支援を求めているのか、また、グループ内でどのような多言語使用が見られるのか、という研究課題について検討した。

分析は、主題分析を用いて行った。主題分析とは、主題を特定した上で体系化し、知見を得るためのアプローチである (Braun & Clarke, 2012)。研究者が意味形成プロセスに積極的に関与し、データセットを縮減することで「パターン化された反応や意味」を見出す手法である。

<sup>1</sup> 海外在留邦人数調査統計 (令和5年度版) によれば、アラブ首長国連邦には4,546人の日本人が居住するが、定住者はわずか151人 (3.3%) である (<https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/index.html> 2024年4月7日閲覧)。

表1 継承語学習コミュニティの概要(ドバイの例)

データ収集	媒体	情報源	情報
フォーカスグループ・インタビュー	録音	保護者6名	家族構成, 言語環境, 継承語教育に対する意識, グループに参加した動機, グループに期待する役割・支援, 使用可能なリソース(リテラシー, 人的ネットワーク, 日本語の使用機会)など
フォーカスグループ・インタビュー	録音	授業を担当する保護者13名	(上記内容に加え)グループにおける授業担当者の役割, 授業内容, 授業を運営する上での課題など
観察(計10グループ)	録画 録音	児童44名 上記13名	習熟度で分けられた10グループ(幼稚園クラス~中学生クラス)の授業観察

#### 4. 研究成果

##### (1) アラブ首長国連邦ドバイにおける事例研究

調査対象は, ドバイで2000年に発足した「日本語サークル」である。主な教育活動は, 在ドバイ日本国総領事館から無償で配布される教科書を用いた「国語の授業」であり, ほかに, 時節の活動や日本語の絵本の貸し出しも行っている。

継承語学習コミュニティに参加する母親は, 家庭という「閉じた空間」で, 子どもの日本語学習を支援し, それを継続することに困難を覚えていた。そのため, 家庭の外側にある「開かれた場」を求め, 他者との関わりの中で, 戦略的に子どもの日本語学習を強化することを選択していた。また, 日本語の使用機会の確保や学習意欲の向上に加え, 「保護者自身の体験を再現し, 子に模倣・追体験させる行為」が, コミュニティメンバーとの協働により実践されていた。

これに関連し, コミュニティに参加する母親は, 継承語教育活動を方向づける「スクリプト形成」を肯定的に捉えていることが示唆された。母親らは, 日本の学校教育で形成されるスクリプト(例: 教室内での定型的なやり取り, 行事における国歌斉唱, 国語の授業での反復練習など)を子どもたちが継承することを望み, こうした「日本的な行為」の教示をグループに期待していることが明らかとなった。

以上, コミュニティに参加する母親の間では, 「日本では(あるいは, 日本の学校では)こうあるべきだ」という一定の規範意識が共有されていた。また, 調査対象となったコミュニティでは, 言語能力のみならず, 日本の学校教育において形成されるスクリプトをどのように伸長させていくかに注力し, 教育活動を行っていた。それは, 状況に応じて「日本人らしく」適切に振る舞うための教育実践でもあり, 母親自身がかつて獲得した「教室内での定型的なやりとり」や「学校行事における一連の行為や言語使用」を子に継承させる行為でもあった。また, 中核となって活動を支えていた保護者が欠けることや, 子どもの日本語習得への希求の程度が異なる家族が新たに参入することにより, 頻繁に摩擦が生じ, コミュニティの弱体化が起こっていることが明らかとなった。

##### (2) オーストラリア・メルボルンにおける事例研究

メルボルンでは, 対象年齢や活動内容の異なる4つの学習コミュニティ(幼児向けの野外活動, 小中学生向けのアート活動, 幼児から中学生までを対象とした文庫活動)においてフィールドワークを行った。44名にフォーカスグループ・インタビューを実施し, 参与観察については, 約100時間, 自然会話の録音・録画は約50時間行った。

調査の結果, 保護者によって運営される小規模な学習コミュニティは, 子どもたちの継承語教育にとって重要なドメインであることが示唆された。また, 社会的インタラクションを目的とした活動(例: 日本の祖父母に手紙やメールを書く)やグループ内の人的ネットワークが日本語の使用機会の確保と学習意欲の向上に寄与していた。さらに, 調査対象となった複数の学習コミュニティにおいては, 子どもが継承語としての日本語にどのように向き合い, どのように習得していけば良いのかという点について, 保護者の間で一定の共通認識が形成されていた。こうしたコミュニティ運営における保護者の価値観は概ね共有され, 教育活動を方向づける重要な要因となっていることが分かった。

これらの成果は, 国内外で発表し(合計9件: International Association of Applied Linguistics など国際学会4件, 異文化間教育学会など5件), 『異文化間教育』第57号など, 2本の論文として公開された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 谷口ジョイ	4. 巻 2
2. 論文標題 ドバイの日系コミュニティにおける保護者主体の継承日本語教育	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中東・北アフリカ日本研究ジャーナル 2023	6. 最初と最後の頁 84-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 谷口ジョイ	4. 巻 2
2. 論文標題 ドバイの日系コミュニティにおける保護者主体の継承日本語教育	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中東・北アフリカ日本研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 84-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 谷口ジョイ	4. 巻 57
2. 論文標題 子どものリテラシーをめぐる研究方法論の転換 帰国児童の言語喪失・保持に関する研究を事例として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 異文化間教育	6. 最初と最後の頁 14-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 谷口ジョイ	4. 巻 56
2. 論文標題 【書評】 瀬尾悠希子（著）『多様化する子どもに向き合う教師たち—継承語教育・補修校授業におけるライフストーリー研究』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 異文化間教育	6. 最初と最後の頁 174-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 谷口ジョイ
2. 発表標題 小規模な継承語学習コミュニティにおける活動内容と運営上の課題
3. 学会等名 EGAJS国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 谷口ジョイ
2. 発表標題 [SYMP39] Language Attrition in the Japanese Context from a CDST Perspective
3. 学会等名 International Association of Applied Linguistics (AILA)（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 谷口ジョイ
2. 発表標題 小規模な継承語学習コミュニティにおける活動内容と運営上の課題
3. 学会等名 JSAA-ICNTJ2023（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 谷口ジョイ
2. 発表標題 [SYMP39] Language Attrition in the Japanese Context from a CDST Perspective
3. 学会等名 AILA2023（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 谷口ジョイ
2. 発表標題 継承語としての日本語学習コミュニティにおける教育実践 ドバイにおける日本語サークルの事例から
3. 学会等名 異文化間教育学会第44回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 谷口ジョイ
2. 発表標題 ドバイにおける継承語としての日本語学習コミュニティ
3. 学会等名 国際エジプト日本研究会シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 谷口ジョイ
2. 発表標題 不可避な移動を経験した子どものことば - 研究方法論的立場の変化に焦点を当てて
3. 学会等名 異文化間教育学会第43回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 谷口ジョイ
2. 発表標題 不可避な移動を経験した子どものことば - 研究方法論的立場の変化に焦点を当てて
3. 学会等名 異文化間教育学会 特定課題研究 第2回公開研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷口ジョイ
2. 発表標題 不可避な移動を経験した子どものことばに対する質的研究の意義と可能性
3. 学会等名 異文化間教育学会 特定課題研究 第1回公開研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷口ジョイ
2. 発表標題 複数言語環境にある子どものバイリテラシー
3. 学会等名 第1言語としてのバイリンガリズム研究会 (BiL1) 第23回研究会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷口ジョイ
2. 発表標題 複数言語環境にある子どものことばに対する質的手法
3. 学会等名 AA研共共課題「継承語とエスニックアイデンティティ」第2回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷口ジョイ
2. 発表標題 海外日系コミュニティにおける保護者主体の継承日本語教育 人的流動性との関係から
3. 学会等名 異文化間教育学会 第42回大会・日本国際理解教育学会 第30回研究大会合同大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 谷口 ジョイ	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 208
3. 書名 Biliteracy in Young Japanese Siblings	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------